

## 「家族になる 夢を見た」

2011/02/10

「ぎゃひー……！！！」

布団に潜り込んできた固まりを蹴り飛ばしたところですよ、  
やく、僕はそこにいるのが誰だかを知った。

「はあ？ 太子？ 何やってんですかこんなところで！」

すると太子は蹴られた腰を痛そうにさすりながら、言い聞かせるような口調と不思議そうな表情でこう答えるのだ。

「何って………お兄ちゃんだからな。きちんと朝ご飯の支度だとしてやったんじゃないか。朝の支度とかな。ほら、着替え着替え。つていうか呼び捨てにすんなもつと敬え！！！」

「お、お兄ちゃん！？」

あまりにもあんまりな響きに、すこんと後ろ頭を叩かれたような衝撃があつて愕然とした。

僕は布団の上に座り込んでいる。

太子は離れたところで座り込んで腰をさすっている。

そういえば部屋は朝の明るい光で満たされていて、今がいつなのか、すんなりわかつて逆に混乱した。

疑問は呼吸の度にふわふわかすむ。気がつけば、何がそんなに不思議なのかと、疑問に思うこと自体が不思議に思えた。

その一、家族ができる夢を見た

「おーい、はよ起きんしやい。遅刻するぞ」

「うー………あと3時間………」

「な、なつが！ お前それ起きる気ゼロだろ？」

「あるよ、あります、それはもう………」

「く、くっそー、この、うらやましいやつめ！ こうしてくれる！！」

「………」

「………」

「………」

「………すやすや」

「ふざけんな！！」

「……………あれ？　そっか、そうか……………」

難しく眉間にしわを寄せる僕を、やさしく見下ろして太子が笑った。

「ほら、何寝ぼけてんだよ、さっさと支度してごはんだごほん！」

「……………はい」

「顔洗うんだぞ。服はそこだから」

「だから、それくらい全部自分でできると。何度言えばわかるんだよ」

「お兄ちゃんだからな」

「理由になつてない」

部屋を出るときに太子に呼び止められる。

何かと思ったら、なんだか情けないようにゆるんだ顔で、こんな事を言い出すのだ。

「おはよう」

なんだろう、それは、速やかに心臓に作用してほんのり痛くする。

ただの挨拶を、まるでこれ以上尊いものなどないとも言おうように、壊れものでも扱おうように、それはそれは静かに太子は言ったのだ。

白い光で太子の輪郭がぼけて見えた。

つられるみたいにして僕の、胸のあたりが痛んだのも、全部、全部同じ理由だと思っただけで、それって一体何だったんだろう。

「……………おはよ」

照れ隠しみたいにして低い声、機嫌が悪いみたいに呟いて、乱暴な足取りで水場に向かった。

今の言い方で太子が落ち込んだりしなければいい。

朝だから、低血圧のせいだからとか、ちゃんと、そう誤解してくれたりいいと思った。

朝ご飯は昨日の夕飯の残りのカレーで。

一日置いたカレーはうまいななんて太子が言った。

嫌味のひとつでもくれてやろうと思ったのに、太子があんまりにもうれしそうに食べているものだから、僕はもうそれでいいような気がしてしまう。

けっきょく返事もできない、何も言えない。

でも太子は気にしてないようだ。

「忘れ物ないか？　お弁当持った？　服は着た？」

「着てるよ！　見てわかれ！」

「パンツは穿かない主義だから」  
「あなたの主義なんかどうでもいいよ！」

玄関先で見送られた。なんだか無性に気恥ずかしい。誤魔化すみたいに怒鳴ってしまったけれども、本当はきつと、ちやんとうれしかったんだ。

くすぐったいみたいにいうれしかった。だからもう、怒鳴るしかなかった。

それでも紛らわしきれなくすぐつたさに唇の端が震えて  
いる。

指摘される前に背を向けて、歩きだした。

どうしようもないなって、太子に、もしくは僕自身に思う。

こつそり、歩きながら頬の筋肉がゆるんで押さえられない。

あーあ、僕、今ものすごく怪しい人なんだろうな一人  
でやにやした。

それから一瞬で真顔になって足を止めた。

ものすごく速度で歩いて家に戻った。

部屋の真ん中で、大の字になって高いびきの太子の耳を容  
赦なくつかんで、引っ張った。

「あなたの仕事はどうした！！」

「ぎやあああああ！！ 痛い痛いのびるのびる！！」

「いつそのびろ！！」

やっぱり、こいつがお兄ちゃんなんてない、絶対、ないな。

とか。

思ったところで目が覚めた。

その二、家族になる夢を見た

た。  
ぎゅー、と抱きしめられていて、その息苦しさを目を開い

「つかぬ事をお尋ねしますが」  
「んー、なあに？」

すぐ耳元で声がする。

笑っているような声だ。

深い微笑みがにじんだ声。

とろけるように幸せそうな。

「どうして僕らはこんなに近いんですか？」  
「私が君のこと、大好きだから」

その大好き、のところでさらにぎゅーっ、と腕の力が強くなつた。

そっか、そうなのか、と僕の意識は納得した。

かわりに別の疑問を浮かび上がった。

「どうしてやわらかいものがあたっていているんですか？」  
「だって私、妹子さんのお嫁さんだもの」

その台詞の最後で、くすくす、と心底楽しそうに、おかしそうに、幸せそうに、笑われた。

ゆっくりと、離れた体を惜しく感じる。

かわりにこっん、とおでこにおでこを合わせられた。

ごく近くで見る目は丸くて大きくて、とてもとてもかわいらしい。

さらさらしてて、むしろ太子からさらさらとした何か素敵なものが振りまかれてるようにも見えて、安心して息を吐き出した。

「そうなんですか」

「うん、そうだよ」

だから私、妹子のこと、だあいすき。

お嫁さんだからもう、ずっとずっと、いっしょだよ。

今度は僕の方から腕を回して、抱きしめた。

すっぽりと腕の中に収まってしまふ体は柔らかくてあつたかくて、首筋に鼻先をすり寄せるとなんだか甘い匂いがしてくらくなる。

ふかふかとやわらかい胸とか。

ほっそりとまるやかな腰とか。

くすくすと耳に届く太子の声がやさしくて、胸の奥からきららと、何か輝かしいようなものがあふれてくるみたいだ。きつと太子の振りまいている素敵なものだ。

それを僕はいっぱい吸い込んでいて、胸の中がいっぱいになって、それでこんなに溢れている。

溢れてこぼれるくらいに今、こんなにも幸せな気持ちでいる。

「大好きです、太子」

「うん、私も」

子供みたいにふたりして、好き、という言葉を繰り返した。  
まるでその言葉しか知らないみたいに。  
何度も、何度も。

飽きることはない。飽きるはずない。

もういっぱいだ、と思っていたのに、繰り返すごとに、もう一言重ねるごとに、もっと大きくもっと深く幸せになる。

あまりにも屈託のない無邪気さに、子供みたいに笑い合った。

それでも、いつかは覚めてしまうのが夢みたいだ。

「好き」

たった二つの音が、こんなにも心の臓を痛くするなんて思わなかった。

昼間のことだ。厳しすぎる日差しにどんどん体力が奪われる。

風一つない、真つ青な空。

鼻の下に汗のたまる感触があつて、拭いたいのだけれども腕を動かせない。

両手を握りしめられていた。

四つ葉の指輪を持たされていた。

正面に立つ人は僕の手をつかんだまま、顔を上げようとはしなかった。

表情は濃い影の中。

隠れて見えない、わからない。

その人の唇がようやく、動く。

何か、言葉を繋いでいるけれども、僕までまっすぐ届かない。

遠くの景色が高温に揺らめいて見える。

同じように太子の言葉も、僕らの間を揺らめいて、僕らの心まで遅れて届く。

「ねえ、君は」

その三、恋人ができる、これは夢？

僕はただ、夢現の境界を見失う。

手の甲に、重ねられた相手の体温と汗を感じて、目眩に耐えて目を閉じる。

「休憩、もうちよつとで終わりじゃないのか？」  
「あ、あ……………」

寝ぼけている。

意識して、起こしかけた体をきちんと起きあがらせた。クラーの稼働音が聞こえてきた。ごうんごうんと、そうだ、もう相当に古い代物なのだ。買い換えればいいのにといつでも思うけれども、きつとそんな経費がないのだろう。

ここはただの休憩室だから、手が回るのは一番最後だ。いつでも最後、後回しだ。

体を起こしたついでに、そのままの流れで後ろに反らせた。うん、と声を漏らして、背中を伸ばす。

少しだけ骨が鳴った。

「私、今日はこれであがりだから」

「まったく、なんか不公平ですよ。あなたが引き継ぎして僕が帰れたらいいのに」

「何その勝手な言い分……………私お前よりはるかに早く始業だったんだけど！」

「はいはい」

その四、生まれ変わる夢を見た

「……………い、おい！！」  
「……………っ！！」

息を詰めて、目を開いた。

横倒しになったロッカーが目に飛び込んできた。

わかっていて言ったに決まっている。

それなのになぜかショックを受けたような人の間抜けな表情に、思わず笑えてくる。

「わかってますよ、もう。冗談に決まってんでしょ。バカですか、もう」

「ああ、なんだ冗談か………え？ バカって言った？ ああ、そうか冗談か………」

「冗談は最初の部分だけですけど………まあ、そういうことにしていいですよ」

僕は適当に答えながら、ロッカーの中の白衣を取って腕を通した。ロッカーの中の鏡で映る範囲内だけチェックする。机に突っ伏してたせいで前髪が一部、変な風にはねていた。手櫛で直してもうまうまかない。仕方ない、トイレに行つて、水でもつけて誤魔化そう。

襟を正して、よし、と気合を入れた。

「それじゃあまあ、一仕事、行ってきますか」

「がんばれよー。なんか、今さら風邪がはやってるみたいだけど」

「う………あんま、忙しいのは好きじゃないんだけど」

あと、子供がうるさいのも。

好き嫌いの問題ではないけれど、子供に泣かれるのは単純に苦手だ。先輩は慣れたと言うけれども、こればかりはどうしようもない。

「妹子せんせー容赦なく注射するからな」

せんせー、ひどい。

けらけらとふざけた声で太子が言う。うるさい、悪いか。必要だと思つたときにしかやってない。

繰り返すが子供に泣かれるのは苦手なのだ。

「あ、あのさ」

部屋を出ようとしたところで声をかけられた。焦つて最後がうわずつていた。ドアノブに手をかけて、首だけで振り返る。

「妹子、終わり何時。あんまり遅くならないならその、私買い物があるからさ！ すぐ家帰らないから、だから………」

だから、と。

繰り返して、しばらく待っても太子は肝心な部分を言わなかった。

その歯切れの悪さに思わず笑う。

なんだよ、とすねた、怒つたような声が返ってきた。

「別に、太子せんせーがいやだったら無理には言いませんが」

だからその、言えない言葉を先読みする。  
どこか飲みに行きませんか、と、そんな誘いの言葉を差し出してやる。

「……………考えといてやる」

本当は、あなたの言葉だったはずなのに。

意地なのか何なのか、太子はもったいぶった言い方でそう、偉そうにふんぞり返ってみせた。

「じゃあ、時間さえ合えばまた後で」  
「んー、じゃあな」

ひらひらと、やる気なさげに手が振られた。

廊下を歩きながら、さっきのやりとりを思い返して僕はこつそり笑う。

まったく、素直なんだか、素直じゃないのか。

なんだ？ 今の。

言いたいことがあるならばそれくらい、言ってくればいいのに。

「言えないんだよな、バカだから」

それから、今日はどこへ行くのか？

太子の好きな店はどこだっけ？

思いだそうとしたとたんに、急速に意識が浮上した。

その五、夢の終わる夢をみた

頭の芯がまだ眠りたがっていた。

同じ体の一部なのに、肌寒さと、暖かさを感じる。

重たい脛をそれでも持ち上げるときに、ひどく億劫な抵抗を感じる。

真っ先に飛び込んだできたものは赤い熟れた光で、眩しさに思わず目を眇めた。



「起きた？」

正面から声が聞こえた。

横倒しの世界に人がいた。倒れているのは僕の方だった。肌寒さに無意識に、何かを手が引き寄せた。それはくたびれて薄くなってしまった布で、そういえば僕の頭の下にも、敷物のような何か折り返されているのだった。

僕は両手をついて、慎重に体を起こす。

あまりに急に動くと、何か、大切なものが全部こぼれていってしまう気がした。

それがなんなのか、どうしてそんなことを考えたのか、理由はわからない。

人の影がゆるりと動いた。紙のこすれる音。僕は目をこすっている。戸を背中にするその人は、影になっていてよくわからない。

僕はぼんやりとする感覚を持って余して、なんだか、ふわふわと落ち着かない心地で座り込んでいる。

「帰ろ」

これは連続する場面なのだろうか。細切れの物語の一部だろうか。

気がつかないうちに目の前に人が立っている。今まで僕が何を考えていたのか思い出せない。

差し出された手の意味を理解するのに時間がかかる。からかいの笑い声が振ってくる。

「ねぼすけめ。何だ、優秀な小野君は、脳味噌まであつちこ置いて来ちゃったの？」

不快の判別だけはすぐについて、僕はそれを表情にのせた。

何も言わずに、睨みつける。

相手に気にした様子はない。

差し出された手のひらがふらりと揺れた。

「帰ろ」

掴んだ手は思ったよりも薄くて、思った通りの熱をはらむ。じわりと熱の重なった部分から、汗ばんでくる心地がする。戸から吹き込む風は冷たくとも、日差しの温度は厳しいものだ。

これからもっと暑くなる。

そう、予感させるような日差しだった。

影が伸びる。影が並ぶ。

別々の人形を細い糸が繋ぐ。

ふらふら、ゆらゆら、揺れるそれに、何かを重ね見たかった気がするのに、もうそれが何なのか僕は思い出せない。寂しい心地がするのは空の色のせいだろうか。

この世の最後だとしても差し支えないくらいに、十分に熟れて、そして死んでいきそうな日の光だった。

「太子」

連続しない意識に何の意味があるだろうか。

ふわふわと現実味のない現実には、混乱も覚えない僕はどうしてしまったのだろうか。

ただ急かされるような焦りに突き動かされて、叫んでいた。繋いだ糸はもうここにはない。

数歩前に行く人の影を踏んで立ち尽くす。

ゆつくりと振り返るその顔も、影の中で見えないけれど。

「いろんな関係があると思う。いろんな可能性があったんだと思う」

それでも僕は。

「今の僕は、」

目を閉じて、そして開いた。

もう、場面は移らない。

「この関係を、大事にしたいと思うんです」

かけがえないものだから。

変えられるようなものでもないのだから。

……………そうでしょう？

「……………そうだね」

影の中の人はきつと、らしくなく笑っていただろう。

さみしさとか名残惜しさとか、複雑ないろいろなを飲み込んで。

だからまだ、僕は言葉をつなげる。

ここで終わりじゃない。

ここで終わらせるわけじゃない。

「この僕は、」

数多ある可能性のうちから一を取る行為。

たとえば百の可能性から一を取るとき、その他九十九を僕は見捨てる訳じゃない。

全部大事だ。

僕は欲深だ。

本当は全部、全部ほしいんだ。

だから。

「全部、覚えています」

きつと、ちゃんと微笑めた。

だってあんたが、バカみたいに、目を丸くして見開いたから。

差し出した手を捕まえてもらった。

空っぽの手のひらをこうやって、きつと二人で満たしていき。

百や万の可能性のすべてできつと、同じ繰り返しを続けていく。

バカみたいに。

「帰りましょう」

「帰ろ」

だから、もう。

この話は、ここでおしまい。

「そっか」

太子は、もう。

何も言わなかった。

僕ももう、何も言わなかった。

この世の終わりみたいな日が暮れる。

反対側の空にはもうすでに、夜の気配が忍び込んでいる。

## 「かわいいあなた」

2011/03/20

「い、も、こゝろ〜！〜！」

いやっ、おっさんの声がする……………。

とか、思っ飛ばし振返したら頭にリボンをつけていやがった。どういうことだろうか。予想だにしない事態にうつかり微笑んでしまいそうになるものの、そこは持ち前の平常心で持ちこたえた。ここでうつかり微笑もうものなら、その異変を受け入れたことになりかねない。そんなことあつてはならない。

ご自慢の伸縮自在な冠は一体どこにいったんでしようね。とりあえず面倒くさかったので何も言わずにどつき倒しておくことにした。

何が起こったのかわからなかったらしく、太子は殴られた頬を押さえてうつすらと微笑んでいた。いつものごとく薄気味悪かった。

「えっ…………なに、私転んだの…………？」

「違いますよ！しっかりしてください。僕の右手がうなりをあげたんです」

「…………どゆこと？」

「有り体に言えばまあ、僕が殴ったんで、そこのところだけはどうもすみませんでした」

「やっぱりねー！！」

猛然とおっさんが立ち直りやがった。しかも地団太踏んで暴れ始める。キレる若者とは誰が言ったんだろう。若者よりよっぽど年長者の方がマナーが悪い。どうしてくれよう。埃が立つて実に嫌な感じだ。止めさせようか一瞬悩んで、しかしそこでまたどつこうものならこの繰り返しにしかならないことに気付いた。それはやっぱり面倒くさい。ので、夕飯の献立を考えながら、太子が落ち着くのを待つことにした。

「ほら、見ろこれ！！」

「見てますって、なんです、そのお天気な頭模様は」

「かわいいだろー、遠慮せずに、私をその貧弱な言語力で一杯誉め称えたついでいいんだぞ」

「背中に芋虫でも這うがごときの悪寒と寒気を感じるくらい似合わないですが、今日はどうぞされたんですか？」

「お前…………貧弱にも程があるだろその言葉選び。何だか苛立ちを超えて憐みすら浮かんで来たんだけど…………褒められた気

がしないし！」

「安心してください太子、僕もこれっぽっちも寝めたつもりがありません！」

「あ、そうなの？ なんだー私の思い違いか」

「で、どうしたんですか、これ」

これ、と頭のリボンを引っ張ってやったらすかさず手をはたかれた。痛みよりも飛び散った手汗の方が気になる。こっそり、服の裾で拭いておいた。

「見えてるからな」

じつとり睨まれても知らないフリだ。いちいち気にしていららいつこうに話が進まない。

どうしたんですか、と親切なことに僕の方からもう一度話題を振ってやった。

「昨日のめざまし見た？」

「見てませんけど」

「今は、かわいいものが若い女の子の間で大人気らしい」

「もういいです」

「な、なんだよ！ 大事なのはここからで」

「もうなんかわかったんでいいです」

「似合ってなくて悪かったなドチクショー！！」

「う、うわあ、今更ですか！？」

ぼろぼろ泣きながらむしりとったリボンをたたきつけられた。おでこにもろに当たって、ただの軽い布のかたまり、リボンのはずなの無性に痛い。じんじんする。さつき手を払われたのよりもよっぽど痛い。どうなってんだ。

太子は僕に背を向けて膝を抱えて座り込んでいた。何事か文句を言っているみたいだ。でも涙声でなに言ってるんだか判然としない。

僕は少しだけ泣きやむのを待って、待ってられなくなつてため息をついた。

「太子」

太子は僕の声なんて聞こえてないみたいだ。

僕は隣に膝をついて、もう一度呼ぶ。

「太子」

ようやくしかめつ面のまま、こつちを見た太子の唇をふさいでやった。

太子はたぶん、驚いている。僕は目を閉じてただ唇を合わせる。少ししよっぱいにおいを吸い込んで、最後に右から左、舌を滑らせた。

太子の唇も塩っぱい。

太子は声にならない悲鳴みたいなものを上げながら、唇を

両手で押さえて後ずさった。

あつと言う間に真つ赤な顔した、その人に、今度は意地悪せずにはちゃんと言つてあげる。

「余計なことしないでいいんですよ。あんたは、そのまんまでも十分かわいいんですから」

こんなものなくつても、投げつけられた、リボンを見せびらかるように指先でひらつかせる。

もつとかわいいところをみるにはどうしたらいいか、思案したのは一瞬だけで、僕はそのリボンにそつと唇を寄せた。ちら、と視線をあげる。

唇に布の感触を当てたまま、腰を抜かしたように座り込んで、惚けたように、僕を見るその瞳を射抜く。

「だからそういう顔は、僕の前だけで、してみせてください」

そうじゃないと僕は嫉妬で気が狂いそうです、と。

最後までちゃんと、省略せずに行つてあげる。

「……………知るか」

ふい、とそつぽを向くその表情もかわいくて、本当に、あなたの泣き顔が大好きで、僕はいつだって泣かせてやりたく

なるのだ。

「あなたが悪いんですからね」

「ん……………」

そばに寄つて、拒まれない。

調子に乗つて、赤くなつた目尻にキスして涙を吸つた。

きゆう、とつむられる目元がかわいい。

すねたよう照れたように、とがらされる唇がとてかわい

い。

「僕の、ですからね」

「……………」

ぼそぼそと太子が何かをつぶやく。

聞き取れなくて、促すように耳を寄せた。

「当たり前だろ」

ぎゆうぎゆう苦しいほどに抱きしめて放したくはない。

そうやって、わかりきつたことを確認するのも幸せだった。